

# 風土とコミュニティの関係論

## The Relationship between Climate and Community

佐藤 瑠美  
Rumi SATO

*Keywords* : climate,community,Berque,Watsuji Tetsuro

キーワード：風土，コミュニティ，ベルク，和辻哲郎

### 1. はじめに

本論文は、風土とコミュニティの関係性に照射し、現代のコミュニティ論に対する現象学的に捉えた風土の視点を用いた一考察である。

コミュニティが日本で活発に議論され始めたのは、1970年代の後半、経済が急速な成長期を迎えた時期である。日本の社会は産業構造の変化とともに地域社会構造の変化に直面していた。その変化が急激であったために、社会の仕組みに変革が求められていたのである。それは交通網の発達、都市への人口集中、マスメディアの浸透という変化をもたらし、農村社会における村落共同体や都市内部に存在していた伝統的隣保組織が淘汰されていった。こうした時代の流れから、共同体から個人と家族を基調とした地域社会の構造が形成されていった。だが、高度産業社会において厳しい競争や技術革新の生活が導入されたことで、個人を基調としたコミュニティでは、人々を支えきれない一面が表面化されてきたのである。

近代が抱えてきたこのような問題は、今日の日本のコミュニティ論へも引き継がれている。2008年におこった経済危機は、グローバル化の影響が人間の生活を大きく左右している実態をあらわにし、「格差社会」という言葉が広く日本の社会に浸透していった。このような現実直面し、従来の日本の諸制度の持続が、危ぶまれていると人々は危惧を抱えているのではないか。また、多大な犠牲を生んだ東日本大震災を契機に、他者とのつながりや絆を取り戻そうという人々の気持ちはいっそう高まっているのではないか。例えば、第三の公共という言葉が定着している。そしてそのなかに、社会的課題をビジネスの手法で解決する起業家達の存在も、今日では珍しくはなくなっているからである。こうした社会背景を鑑みると、人や地域とのつながりの再構築という意味で、コミュニティは重要な今日的課題の一つと認識されている。

近代化によってもたらされた以上のような課題に解決を見いだすために、注目されているの

が社会関係資本である。この概念については後述するが、ひとまずはコミュニティや人々のつながりの概念と呼んでおきたい。最近の研究においても、社会関係資本の概念を用いた実証的な研究は多く行われている。

だが、こうした概念の用いられ方は、「地域を活性化するため」等の目的を達成するための手段と考えられる。そこには「人間にとって、人々やコミュニティとのつながりとは、何か」という視点が欠けていると考えられる。そうした吟味が欠けたまま、目的が意図された社会関係資本の醸成には、人間やコミュニティに対する新たな課題を生み出す可能性ははらんでいる。

本論文では、こうした問題意識を持ちながら、これからの人間とコミュニティ論に関する示唆を提起するものである。

## 2. コミュニティ<sup>1)</sup>とは

現代のコミュニティを考察するために、コミュニティの概念がどのように捉えられてきたかを確認する必要がある。マッキーバーの『コミュニティ』は、コミュニティ論の先駆けであり、その論理背景にはヨーロッパからアメリカ新大陸に渡来した人々の歴史が背景となっている。

私は、コミュニティという語を、村とか町、あるいは地方や国とかもっと広い範囲の共同生活のいずれかの領域を指すのに用いようと思う。ある領域がコミュニティの名に値するには、それより広い領域からそれが何程か区別されなければならず、共同生活はその領域の境界が何らかの意味をもついくつかの独自の特徴をもっている。物理的、生物学的、心理学的な宇宙諸法則のすべては、共に生活する諸存在を互いに類似させるうえに力を貸している。人間がともに生活するところには常に、ある種のまたある程度の独自の共通の諸特徴—風俗、伝統、言葉使いそのほか—が発達する。

社会関係は最も不十分なものでさえ、世界の果てにまで拡がる社会的接触の連鎖のなかの一部である。このように生起する社会諸関係の無限の系列のなかに、われわれは都市[市民]や民族や部族といったより集約的な共同生活の諸核を識別し、それらを〈すぐれて〉コミュニティをみなすわけである(マッキーバー, 1917)<sup>2)</sup>。

一方でマッキーバーは、アソシエーションの概念をコミュニティのそれとを対比的に検討し、概念の説明を進めている。

アソシエーションとは、社会的存在がある共同の関心[利害]または諸関心を追求するための組織体(あるいは〈組織される〉社会的存在の一团)である。それは、共同目的にもとづいてつくられる確定した社会的統一体である。

社会的存在がもつどの可能な関心にも、すべて対応するアソシエーションがあるといつてよいであろう（マッキーバー, 1917）<sup>3)</sup>。

このように、アソシエーションとそれらを内包するコミュニティとを解説し、次のように規定している。

コミュニティは、社会生活の、つまり社会的存在の共同生活の焦点であるが、アソシエーションは、ある共同の関心または諸関心の追求のために明確に設立された社会生活の組織体である（マッキーバー, 1917）<sup>4)</sup>。

マッキーバーのコミュニティ論にも影響を与えたのが、ドイツ人哲学・社会学者のテンニエスである。社会集団を主題とした『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』は、コミュニティの概念の原型をつくりだした。

テンニエスは人間の意思が基軸になり、社会生活が展開されるということを前提し、人間同士の結ばれ方から「実在的有機的な生命体と考えられるものと、観念的機械的な形成物と考えられるものがある—前者がゲマインシャフトの本質であり、後者がゲゼルシャフトの概念である」（テンニエス, 1887）。「すべての信頼にみちた親密な水入らずの共同生活は、（われわれの見るところでは）、ゲマインシャフトにおける生活と解される。ゲゼルシャフトは公共生活（Öffentlichkeit）であり、世間（Welt）である」<sup>5)</sup>（テンニエス, 1887）と区別して規定している。

この両者は、全ての観点において対照的に論じられている。テンニエスは、ゲマインシャフトは感性が理性を内包する「本質意思」によって形成され、ゲゼルシャフトは理性が感性を従える「選択意思」によって形成されると両者の特色を記述する<sup>7)</sup>。

テンニエスとマッキーバーの類似点からコミュニティの概念を確認すると、広義のコミュニティは次の2つに大別できる。何かしらの目的を共有した機能的な社会集団という点で、マッキーバーの「アソシエーション」に対応するのが、テンニエスの「ゲゼルシャフト」である。他方で目的とその機能を有せずに、他者との共同生活の共通項で結ばれた社会集団という点でマッキーバーのコミュニティはテンニエスの「ゲマインシャフト」に対応すると解釈が可能である。

では、日本における一般的な概念はどのように認識されているのか。『言泉』によるとコミュニティとは、「村落、都市、地方など、地域性と共同性という二つの要件を中心に構成されている社会のこと。住民は共通の社会観念、生活様式、伝統をもち、強い共同体意識がみられる。地域社会」<sup>8)</sup>。また地域とは「区画されたある範疇の土地」<sup>9)</sup>である。

以上の所見解をまとめると、コミュニティとは、共同体ないしは地域社会と同義と判断される。これは、場（土地、所属）に条件づけられるとともに、人との結ばれ方によって、共通の

目的達成のための機能的コミュニティと、機能的ではない共同生活の共通項によるコミュニティに大別できる。

### 3. 近代化と日本の共同体の特色

では、日本の共同体の特色についてみていきたい。日本の民衆の歴史をたどると、共同体がある程度形成されつつあると言われているのが中世に入ってからである。だが、近代の原型として扱われているのは、近世・江戸期の共同体である。農村共同体が生まれ、農業・工業・商業の分離が進行し、商品経済が浸透し始めていった。それに伴い、いくつかの特色を備えた共同体が形成されていた。明治維新以降に、江戸期の共同体は崩壊し、村と村人の国家への統合が押し進められ、天皇制との結びつきが図られて行く<sup>10)</sup>。

内山節は、時代や地域による違いがあったとしても、人間が共同体のなかで共有世界をもって生きていた精神が、現在残っている伝統的共同体の古層に存在しているとし、具体的事例に基づき「日本の伝統的共同体とはなにか」を明らかにした。日本の共同体の特色について内山は次のように述べている。

自然と人間の共同体であり、生と死を総合した共同体であることが、日本の共同体に複雑な仕組みを与えることになった。さらに中世以来の自治の精神がかたちを変えながらも流れつづけ、江戸期以降は家業の精神が共同体に影響を与えた。それらのことが日本に独自の共同体を展開させた。

その共同体は多層的共同体としてつくられ、小さな共同体が積み重なることによって共同体の社会ができるという性格をもっている。(内山, 2010)<sup>11)</sup> 内山の指摘を日本の伝統的な共同体の特色として理解するのであれば、共同体の構成をなす祖先とのつながりそして自然とのつながりが、先述した西洋のコミュニティの特色に含まれていない点を確認しておきたい。

1969年、国民生活審議会コミュニティ問題小委員会が作成した「コミュニティ生活の場における人間性の回復―」を参照すると、高度経済成長期に行われた共同体論は、封建制度下にある不自由な人々という前提に立っていた<sup>12)</sup>。すなわち、共同体に対する否定的な認識が前提にあったのである。明治期における近代国家形成および終戦後の欧米から持ち込まれた個人と家族を基調とした市民社会を実現するべく諸制度を定着させるあたり、共同体は解体し、乗り越えるべきものとされていた<sup>13)</sup>。

だが一方で、古くからの地域共同体が崩壊することに伴い、終戦後の急速な近代化は多くの課題を生み出したといえる。1969年の「コミュニティ生活の場における人間性の回復―」では、共同体の崩壊に伴う当時の課題を具体的に明記している。それによると、①家族制度の変革に伴い、家族間の結びつきの希薄化②主婦の就労が増加したことに伴う鍵っ子の増加と、

家庭内外でのしつけの消失③孤独な余生をおくる高齢者④余暇の活動時間や活動組織の場の現象⑤公害と交通事故⑥急病人の対応が困難になると記述されている<sup>14)</sup>。これらは、終戦以前において自然に担っていた共同体の機能である<sup>15)</sup>。そうした、近代化が加速するに従い、課題が浮上してきたことから、古来とは異なる新たなコミュニティ必要論が提起されてきた。

このように、日本のコミュニティは、大きくわけて明治維新以降と終戦以降に崩壊の岐路にたってきたと考えられる。そして、今日コミュニティ論が焦点化される理由は、終戦以降に課題とされた流れを引き継ぐものであり、近代化に伴い喪失した人々のつながりを、どのように回復させるかという意味を持っていると考える。その手段として、近代は社会関係資本の概念に注目が集まり、その概念を活用した実証的な研究が多く行われている。

#### 4. 社会関係資本に関する先行研究

それでは社会関係資本について検討を行う。社会関係資本（ソーシャルキャピタル）<sup>16)</sup>はロバート・パットナムらによって注目を集めた概念である。パットナムは、1970年代から1990年代アメリカにおける社会調査を追跡し、多様な社会側面と社会関係資本との関連について考察している。それによると、社会関係資本の源泉は、ネットワーク自体にあるのではなく、人々の規範や信頼のなかにあるとされている<sup>17)</sup>。

パットナムの社会関係資本の概念を採用した研究は近年盛んに行われている。その多くは、事例を用いた実証的研究であり、健康概念との関連においては自治体の諸調査等の量的研究が主であり、質的研究は稀という報告もある<sup>18)</sup>。

諸調査や事例に基づき、社会関係資本の概念を用いた考察が先行研究の傾向と言える。だが、パットナムらの社会関係資本は近代のアメリカの社会調査を基礎に置いて、構築された概念である。それゆえ、内山が示した日本の伝統的共同体の特色である祖先や自然との関係性が含まれてはいない。そのため、アメリカの諸調査に基づいた概念を日本のコミュニティに応用するには吟味を要するのではないかと疑念が生まれる。

こうした考えに基づき、筆者は最近研究されているコミュニティと社会関係資本等連帯に関する研究のレビューを行った<sup>19)</sup>。その結果、コミュニティと連帯に類する研究において、社会関係資本と同様に具体的事例を用いた実証研究が多く行われている。例えば、保存されている歴史的家屋や民芸品、アートや地場産業、祭り等がどのように地域社会の活性や連帯に役立つのかを論じた事例研究が主な内容である。また、地域社会の歴史的ストックやアート活動の地域社会への貢献についての事例研究もある<sup>20)</sup>。

だが、こうした研究の目的は、住民主体の地域活性化を図り経済的自立を促すこと、あるいは景観保全が研究の意義となっている。こうした先行研究は、先述した目的達成のための機能的なコミュニティ形成に貢献する内容であり、目的が先行しない、人々が実在的有機的生命体として結ばれたコミュニティの形成に寄与するものではない。前者の議論も必要ではあるが、

あるコミュニティにとって目的ありきの人々の結びつきは、目的に貢献しない人々や行為を承認できなくなる危険性がある。最初は人間のためのコミュニティであったとしても、人間の疎外の本質<sup>21)</sup>によって目的達成のための道具的に捉えた人間に陥り、自己や他者とのつながりを見失うコミュニティをつくりだす危惧もある。

いずれにせよ、コミュニティを形成する以前に吟味されるべき、祖先と自然の関係性の観点に焦点をあてた研究は稀である。また、目的によって結ばれた機能的側面としてコミュニティを形成することに意義が置かれた研究に偏っており、実在的有機的生命体として人々が結ばれたコミュニティの形成に貢献するための、本質的なコミュニティの意味を明らかにする研究は近年では極めて少ないと考えられる。

このようにコミュニティ論を概観してみると、人間と景観の関係性に光を当てた島崎義治の研究<sup>22)</sup>は貴重である。彼の論考では、景観保全やまちづくりへの貢献に留まらず、景観と人間との関係性そのものについて言及している。これは、景観保全やまちづくりのための景観の在り方、つまり機能的なコミュニティについて問うているだけでなく、人間にとって景観とは何かについても解を導きだしている。ここでは景観は自然という文言でも言い換えて示すことができ、人間と自然の関係が考察されているからである。

そして、人間と風土の関係性において本質的な提起を行っているのが、フランス人社会学者オギュスタン・バルクである。彼は和辻哲郎の『風土』<sup>23)</sup>を踏襲し、環境と風土を和辻が峻別し規定したのを確認している。和辻はハイデッガーの研究者であることから、風土を現象学的<sup>24)</sup>に捉えている。環境が、対象化されたものであるのに対して、風土は人間の主体性を前提としている。それは「風土的形象が主体的な人間存在の表現」(バルク, 2005)<sup>25)</sup>と述べられている。後者の視点を用いることにより、人間は自然について、環境的に関わるのではなく、風土的に捉える必要があるとしている。このことは、人間の存在の構造契機について根本的に再考する必要性の提起であった<sup>26)</sup>。

筆者も、この考えに同意しており、人間と自然との関係性を環境的ではなく、風土的に捉える試みが求められると考えた。現象学から捉える風土の概念は、日本の共同体の特色である死者と自然と今日の人間たちの関係性にも示唆を与えると仮定できるからである。それにより、本論文の主題である「コミュニティ」とは、どうあるべきかに貢献できると考える。したがって、次項では、和辻およびバルクの風土学を深めることにより、コミュニティと風土との関係性について考察するに至った。この考察は、機能的なコミュニティではなく、人間にとってコミュニティとは何かという本質的な問いへの一考察である。なおかつ、伝統的な日本のコミュニティの特色である自然と死者と結ばれたコミュニティの在り方に対する一考察でもある。

## 5. 現象学的な風土の概念

オギュスタン・バルクは日本での生活経験が研究動機となっており、和辻の風土学に影響を

受けている。ベルクは、人類学者ルロワ・ゲーランの〈社会身体〉(corps social) と和辻の風土性を手がかりに独自の風土学を研究している<sup>27)</sup>。本論では、和辻ならびにベルクの風土学が現象学的に論述されている点で、本論文について共に示唆的であると考えられる。それゆえ、両者の風土学を読み解きながら、コミュニティの考察につなげていきたい。

### 5.1 人間存在の構造契機としての風土

和辻は、マルティン・ハイデッガーの『存在と時間』を素材にして、ハイデッガーの人間存在の構造が時間性の視点から捉えられており、空間性の視点が欠けている点に不足感を抱いた。そのことから時間性と空間性の視点から捉えられた、人間存在の風土学的規定が試みられた<sup>28)</sup>。その規定にあたり、「人間存在の構造契機としての風土性を明らかにする<sup>29)</sup>」(和辻, 1935) のであり、「それは主体的な人間存在の表現としてであって、いわゆる自然環境としてではない<sup>30)</sup>」(和辻, 1935) と序言に述べる。これは、自然環境が対象化されたものであるのに対して、主体的な人間存在の構造契機としての風土を明らかにすることを明示している。

彼は、人間が寒さを感じる場合や花をみて遊ぶのを例にあげて、風土学を論説している。

寒さの中に出ているのは単に我れのみではなくして我々である。否、我々であるところの我れ、我れであるところの我々である。「外に出る」ことを根本的規定としているのはかかる我々であって単なる我れではない。従って、「外に出る」という構造も、寒気というごとき「もの」の中に出るよりも先に、すでに他の我々の中に出るということにおいて存している。これは志向的關係ではなくして「間柄」である。

だから寒さにおいて己れを見いだすのは、根源的には間柄としての我々なのである(和辻, 1935)

我々は「風土」において我々自身を間柄として我々自身を、見いだすのである。

このような自己了解は、寒さ暑さを感じず「主観」としての、あるいは花を遊ぶ主観としての、「我れ」を理解することではない。我々はこれらの体験において「主観」に目を向けはしない。寒さを感じずる時には我々は身体を引き締める、着物を着る、火鉢のそばによる。否、それよりもさらに強い関心をもって子供に着物を着せ、老人を火のそばへ押しやる。あるいは着物や炭を買い得るために労働する。炭屋は山で炭をやき、織布工場は反物を製造する。すなわち寒さとの「かわり」においては、我々は寒さをふせぐさまざまな手段に個人的・社会的に入り込んでいくのである(和辻, 1935)<sup>32)</sup>。

このような寒さを感じる際の風土と人間の関係性への説明をみると、和辻の風土学は、現象学的な捉え方をしており、風土と人間とが「間柄」の概念で結ばれているのが特徴といえよう。和辻によると風土という間柄において、我々は、人間の構造を見いだすことが可能になるという。ここから、客観的に捉えられる環境ではなく、風土と人間は自己了解的な間柄におい

て区別がなされていないと理解ができる。そして、それが主体的な人間存在の構造契機と考えられる。

和辻の風土の概念について理解を進めるにあたり、ベルクの風土についても述べていきたい。ベルクは風土に留まらずに広義に日本の文化を研究対象として社会学的な捉え方をしていた。それゆえ、和辻の影響だけでなく、人類学者のアンドレ・ルロワ＝グーランの〈社会身体〉の概念に着想を得ている。ベルクによると、ルロワ＝グーランはハイデガーや和辻の主張をまったく知ることなく次のような概念を明らかにした。それは、人類が出現するさいに〈動物身体〉(corps animal)と〈社会身体〉(corps social)が構造的に相補的であった、というものである。これを受けてベルクは、社会身体が動物身体の機能が技術的・象徴的体系へと外化することによって構成されたが、こうした展開が翻って動物身体に変容を生み出し、これが人間としての特性を進化させたとしている<sup>33)</sup>。このことの要点を以下に引用する。

個別性を超えた社会身体—私は〈風土身体〉(corps médial)と言いたいが、それはこうした技術的ないし象徴的体系が必然的に生態系と結びつき、一体となって私たちの風土を形成するからだ—なしには、ヒトはけっして存在しなかったし、私たちの誰も生きることはできないだろうということだ。

風土性とは、人間存在の二つの面によって構成される、こうした力動的な相補性—構造契機—である。その動物的な反面は、(それが人間存在をヒトという種に結びつける以外は)個別的であり、また風土的な半面は、集団的、つまり空間においても時間においても超個人的で間主観的である(ベルク, 2008)<sup>34)</sup>。

こうして見ると、ベルクが風土身体として呼んだ概念(ルロワ＝グーランの社会身体)は、時空間において、まさに風土性と言われるものである。ベルクの導きだした風景という知とは、和辻が人間存在の構造契機として捉えた風土性の概念に他ならない。

ベルクの風土学の観点から和辻の風土の概念を説明する方法で、人間存在の構造契機としての風土を説明してきた。やはりこの概念は現象学的であることは明らかであるが、そのことと、先述した日本のコミュニティの構成をなす自然とは、どう絡んでいるのかについて理解を進めてみよう。

ベルクは、和辻が『風土』において、風土と自然環境を区別して論述されていることをあげている。和辻によると環境は、客観化の結果である。そして環境は、必然的に社会というもう一つの思考対象から分離されるという。この分離は、社会と環境の間を隠蔽するものとし、その隠された関係が風土である、との和辻の論理を提示する。

ベルクの説明する和辻の論理に従うなら、客観化してとらえられた環境は、人間のコミュニティともいえる社会から分離された状態で理解される。これは、先述した風土身体や風土性という人間存在の構造契機を見いだされずに捉えられていることでもある。この環境と



いう概念で風景を捉え、社会や人間という思考対象を分離した状態で議論されてきたのが、コミュニティの機能面に偏った研究が多く行われてきた理由の一つであると考えられる。逆説的には、自然を含めたコミュニティについて検討するには、ベルクも既に指摘していることだが<sup>35)</sup>、人間を風土性あるいは風土身体として捉える思想が求められると考えられよう。そのことが、必然的に自然を含めたコミュニティの形成につながっていると導きだされる。

## 5.2 風土とコミュニティの歴史の体積

日本の共同体は人間と自然として祖先が含まれる。死者とは、先祖と言い換えることもできよう。そうした場合、風土と祖先とはどのように関係になっているのか考察をすすめる。

和辻は、人間がつくりだす日常におけるさまざまな手段、たとえば着物、火鉢、防波堤、風に対する家の構造、これらは風土との関わりなしにつくり出されたのでないと以下のように説明している。

我々は風土において我々自身を見、その自己了解において我々自身の自由なる形成に向かったのである。しかも我々は寒さ暑さにおいて、あるいは暴風・洪水において、単に現在の我々の間において防ぐことをともにし働きをともにするというだけではない。我々は祖先以来の永い間の了解の堆積を我々のものとしているのである（和辻、1935）<sup>36)</sup>。

人が生活道具をつくりだす場合だけでなく、食物をどのように調理して食べるのかという様式についても、その風土に規定されていると説明している。そして「料理の様式が一つの民族の永い間の風土的自己了解を表現する<sup>37)</sup>」（和辻、1935）以上のような説明は、日常生活に持ち込まれている風土現象であり、人間の自己了解の在り方であると理解ができる。会ったことのない祖先が含まれていたとしても、そうした祖先との結びつきが、営まれる労働や生活のなかに風土現象として表出しているのである。

和辻は、『風土』において、風土の側から人間の自己了解の在り方を明らかにしようと試みている。他方で、人間の側から「人間存在」についても言及している。

人間存在の空間的・時間的構造は風土性・歴史性として己を現してくる。時間と空間との不即不離が歴史と風土との相即不離の根底である。主体の人間の空間的構造にもとづくことなしには一切の社会的構造は不可能であり、社会的存在にもとづくことなしには時間性が歴史性となることはない。歴史性は社会的存在の構造なのである（和辻、1935）<sup>38)</sup>。

和辻は時間性と空間性を分離して捉えるのではなく、一体として捉えるべきとの考えをもっていた。その考えに従い、風土を捉えると、風土という空間性には必ず歴史という時間性が同時に有る。そうした論理であることが、人間が祖先の歴史を受け継いだ社会的存在であり、そ

これは、日常生活の風土現象として表現されていると解釈できる。このことは、風土性において、人間が祖先と結びつきをもっているのが示された風土現象であるとも言えられる。

そして、和辻は風土についてのこうした視点を有する意義は、人間存在の存在論的把握もはや単に時間性を構造とする「超越」によってのみは遂げられない点にあるという。人間と他者の間柄そのものが「外に出る」(ex-sistere) 場面である。こうした超越について次のように述べる。

超越は風土的に外に出ることである。すなわち人間が風土において己を見いだすことである。個人の立場ではそれは身体の自覚になる。が、一層具体的な地盤たる人間存在にとっては、それは共同態の形成の仕方、したがって言語の作り方、さらには生産の仕方や家屋の作り方等々において現れてくる。人間の存在構造としての 超越はこれらすべてを含まなくてはならぬ(和辻, 1935)<sup>39)</sup>

このように、人間存在が風土的に規定される時、日常生活の様式について、それらと密接に関わるコミュニティの形成の仕方に渡って表現されると理解できる。人間を自己了解の構造契機という風土的に捉えられる時に、祖先とのつながりが見えてくる。それは、あらゆる日常生活の諸現象において表出されうると考えられる。

## 6. 結論

本論文では初めに、テンニエスとマッキーバーの著書を頼りに、古典的なコミュニティ論を確認した。そして、実在的有機的なコミュニティと観念的機能的なコミュニティとに大別可能とした。次に、西洋とは異なる日本の伝統的なコミュニティの在り方を確認した。それを踏まえると、コミュニティの構成要素に人間の他自然と祖先が含まれていないことを指摘した。

その上で、最近行われているコミュニティに関する先行研究を概観した。その多くは社会関係資本の概念を用いた研究も含めて、コミュニティの本質を規定して行われたものではなく、コミュニティの機能的側面にその規定が置かれていた。なおかつ伝統的な日本の共同体を構成する自然と祖先の視点が含まれているものは少ないことがわかってきた。

そこで、コミュニティを構成する先祖と自然との関わりを、現象学の視点をを用いて明らかにするべく試みた。それには、バルクと和辻哲郎の風土学を辿る過程から記述的に明らかにしていった。

その結果、まず人間のあり方を捉えなおす必要が提起される。その理由は、人間を風土身体あるいは風土性として捉えることによって、自然や祖先との結びつきを確認できると明らかになったからである。バルクは人間の自然との向き合い方について次のように述べている。「環境的に考えるだけでなく、風土的に考えなければなりません。我々の存在の構造契機そのも

のを根本的に再考しなければなりません」<sup>40)</sup>(ベルク, 2005) その理由は、人間存在の構造契機としての風土は、客観化した環境には捉えることのできない風土性、すなわち祖先やコミュニティの歴史と自然との交わりを了解可能にすると考えられるからである。

したがって、コミュニティを対象化した視点から形成される観念的機能的なコミュニティの形成を目指す視点も持ちながら、実質的有機的なコミュニティをも形成する視点も求められる。それには、コミュニティを構成する人間の存在を風土性と捉えることが、必然的に後者のコミュニティ形成につながってくると考える。

本論文では、以上の視点を提起するに留まった。また近現代に急速に発達した情報化に伴う新たな他者との結ばれかたについても、考察の検討材料に含まなかった点を今後の課題として明記する。

あらためて、周辺を見渡すと、都市化が進行している現実を実感する。都市に限らず、地方へ赴いても、全国展開のチェーン店やコンビニエンスストア、グローバル展開のコーヒーショップ、全国どこへ行っても同じ店舗が置かれたショッピングモールが目にとまる。こうしたなかには、地域性に根付いた文化や伝統を見いだすのは難しいのである。それでも、この風景はわれわれ現代を生きる人々の存在の構造契機である。こうした風景も、現在の日本の風土性であるといえよう。

いかにコミュニティをなす祖先や自然との結びつきから離れてしまったと実感し、改めようとしても、現実に存在しているものは、すぐには壊すことができはしない。それは、いかなる現実であっても、人々の生活の仕組みが営まれているからである。現実を壊していくことは、人々の生活の営みを壊すことであるからである。それには、犠牲を伴うことがある。

これからのコミュニティに求められるのは、これまで作り出してきた現実を受け入れつつも、これから創出するコミュニティは変えられると認識することである。そう認識した先に、伝統的なコミュニティとは異なるが、実在的有機的な生命体として結ばれたコミュニティがづくりだされると考える。

## 【注】

- 1) 本論文では、コミュニティ、共同体および地域社会を同義語として扱う。但し、日本で「コミュニティ」という言葉が用いられたのは明治期以降であることから、日本の近世において用いる場合にはコミュニティではなく、共同体と表記する。
- 2) R.M.Maclver (2009) 46頁『コミュニティ—社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論—』ミネルヴァ書房(原著“*COMMUNITY A Sociological Study; Being an Attempt to Set Out the Nature and Fundamental Laws of Social Life*”1917)
- 3) 同上、46-47頁
- 4) 同上、47頁
- 5) Ferdinand Tönnies (1957) 34-35頁『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』岩波書店(原著“*Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der Soziologie*”1887)

- 6) 同上、35頁
- 7) Ferdinand Tönnies (1957) 164頁『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』岩波書店(原著“Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der Soziologie” 1887) テンニエスは、人間の本質意思が、実在的・自然的な統一として理解される。他方で選択意思は、観念的・人為的な統一として理解されると示している。
- 8) 尚学図書編 (1986) 869頁『国語大辞典言泉』小学館
- 9) 同上、1482頁
- 10) 内山節 (2010) 30頁『共同体の基礎理論 自然と人間の基層から』農山漁村文化協会 内山はまた、この国家と人民の関係をつくりだすために神仏分離令が行われ、それを寺の破壊と理解した人々が暴走したと指摘する。明治期以前の農村共同体が彼によれば強固であったのは、民衆の共有する精神世界によって結束されていた。民衆は、日本の伝統的共同体の特色である生と死の統合された世界と、自然と共振する人間の世界を見ていたからである。それゆえ神仏分離令は共同体の結束を壊すための政策であったと記述されている(内山節 (2010) 140頁『共同体の基礎理論 自然と人間の基層から』農山漁村文化協会)
- 11) 内山節 (2010) 99頁『共同体の基礎理論 自然と人間の基層から』農山漁村文化協会 また共同体論における人間と自然との関係性について、内山は共同体論の古典である大塚久雄が、日本の文明の発展度が低いために、人間が自然に緊縛され、隷属している、と考えたという。それに対して、日本の自然・人間観を引き出し、それに従うのなら、同じ時空で人間と自然が共存してきたことは、強い結びつきをもっているが、隷属しているとは解釈できないと内山は反論している(内山節 (2010) 41頁『共同体の基礎理論 自然と人間の基層から』農山漁村文化協会)
- 12) 1969年、国民生活審議会コミュニティ問題小委員会が作成した「コミュニティ生活の場における人間性の回復一」(157頁)では、地域共同体が崩壊し「近隣にわずらわされない個人中心のマイホーム的な生活が一般化している。このような生活は、過去の地域的な束縛からの解放を意味する」と記載されている。
- 13) 内山節 (2010) 18頁『共同体の基礎理論 自然と人間の基層から』農山漁村文化協会
- 14) 国民生活審議会コミュニティ問題小委員会 (1969)「コミュニティ生活の場における人間性の回復一」(161-162)
- 15) 国民生活審議会コミュニティ問題小委員会以上の6つの課題について、公害問題や余暇の活動時間、急病人への対応等は厳密には伝統的共同体の衰退に伴って浮上してきたものではないと考えられる。だが、その論点は本論文では研究の目的としていないので、今回は議論を控えることとする。
- 16) L. J. ハニファン (1916) によって最初に用いられた概念である。個人単位や社会の単位によって保有される関係のネットワークに含まれる、あるいはネットワークを通じて利用できる、ネットワークから生じる現実や潜在的な資源の総和(パットナム, 2000)。
- 17) ロバート・パットナム (2006)『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書(原著“BOWLING ALONE; The Collapse and Revival of American Community” 2000)
- 18) 井上智代・片平伸子ら (2013)「日本におけるソーシャル・キャピタルと健康に関する文献研究」『新潟県立看護大学紀要』第2巻
- 19) Ciniiを活用し「地域」「コミュニティ」「連帯」「つながり」をキーワードにして検索した。
- 20) 小山健一・山口洋典 (2010)「市民参加演劇の活動を通じた公民協働による地域活性化の方途アウトリーチとインリーチの反復的交替の視点を中心に一」『同志社政策科学研究』12 (1), 17-32頁/碓田智子・谷直樹ら (2007)「歴史的ストックを活用した観光イベント型伝統行事に関する調査研究—岡山県倉敷と新潟県村上の屏風祭と雛祭について—」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1353-1354頁/大原謙一郎 (2006)「倉敷学入門—歴史・文化・美術館とまちづくり—」『文化経済学』第5巻, 第2号, 3-6頁/石川隆代 (2007)「地域活性化と伝統的關係について—倉敷屏風祭と町衆—」『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』第14号, 77-84頁
- 21) 拙稿 (2014)「人間存在としての「生」の回復について」『目白大学人文学研究』第10号, 15-30

- 頁を参照されたい。
- 22) 島崎義治 (2005) 「インターフェイスなる景観」『人間環境論集4』41-62頁 島崎は、景観を造形の考え方で捉え、そうした場合景観は人と町をつなぐインタフェースとして理解できるとして。景観とは、現実の様々な景観を観察し、その過程から町や空間、場所等の動きや働きが翻訳され、目に見える形として表現されたものである。景観を地域で共有するだけでなく、景観として地域の潜在的な具体的に顕在化することで、生きたまちづくりが求められると主張している。
- 23) 和辻哲郎 (1935) 『風土 人間学的考察』岩波文庫
- 24) 現象学とは、18世紀後半にランベルトによって用いられた概念。絶対的な存在はそれ自身で把握できず、現象において把握できるという考え方である。19世紀末以降のフッサール現象学によって、現象学は哲学における立場を確立した。その後、ハイデッガーやメルロ＝ポンティらへと影響を与えた。ヘーゲルの『精神現象学』(1807)もまた、意識が感覚的確信から絶対知にいたる道程を記述し、哲学を体系づけた。ヘーゲル以降に、現象学の語は多義的に用いられるようになった。和辻哲郎は、ハイデッガーから影響を受けていた。
- 25) A. ベルク (2005) 「風景と持続性のつながりとしての風土性」『ランドスケープ研究』69-2, 122頁
- 26) 同上、122-125頁
- 27) ベルクは、風景を対象とする知すなわち風景への反省を〈風景という知〉と示し、独自の風土学を論じた (Augustin Berque (2011) 8頁『風景という知—近代のパラダイムを超えて—』世界思想社 (原著 “*LA PENSÉE PAYSAGÈRE*” 2008)) 思想社 (原著 “*LA PENSÉE PAYSAGÈRE*” 2008)
- 28) 和辻哲郎 (1935) 3-4頁 『風土 人間学的考察』岩波文庫
- 29) 同上、3-4頁
- 30) 同上、3-4頁
- 31) 同上、14頁
- 32) 同上、15-16頁
- 33) Augustin Berque (2011) 100頁 『風景という知—近代のパラダイムを超えて—』世界思想社 (原著 “*LA PENSÉE PAYSAGÈRE*” 2008)
- 34) 同上、100頁
- 35) ベルクは、ツーリズムと全域的都市化という形で風景が消費の対象となっている、それにより生態学的に維持しがたく、持続不可能な生活形態、倫理的に正当化しがたく、美的に受け入れがたい現実をもたらしたと批判している。こうした現実が、今日の存在自体の構造契機、風土性と認識すべきである。そうして、人間が風土身体を引き受ける必要があると主張している。(Augustin Berque (2011) 104頁 『風景という知—近代のパラダイムを超えて—』世界 思想社 (原著 “*LA PENSÉE PAYSAGÈRE*” 2008))
- 36) 和辻哲郎 (1935) 17頁 『風土 人間学的考察』岩波文庫
- 37) 同上、19頁
- 38) 同上、22頁
- 39) 同上、26頁
- 40) A. ベルク (2005) 「風景と持続性のつながりとしての風土性」『ランドスケープ研究』69-2, 125頁

(平成26年11月4日受理)